

特集●共産主義終焉の後に
マルクス主義は曲がりなりに「大状況」を映す鏡であった。
その後の実存主義、構造主義、ポストモダン……は「小状況」だけを映した。
すべての思想の色あせた今こそ、新たな思想の時代――。

マルクス主義の 瓦礫を越えて

◎東京工業大学助教授 橋爪大三郎

東欧諸国が木の葉のように、自由化の荒波にもまれていく。中国もソビエトも、それぞれ苦難の道を歩んでいる。資本主義に追いつき追いつく越すという威勢のいい意気ごみは、とっくのとうに昔語りになった。あべこべに、資本主義諸国の圧倒的な活力のまえに、防戦一方。ソビエトがゴルバチョフ流・ペレストロイカの線で収まらず、もう一段厳しい場所にいずれ追いつめられていくことも、必至の情勢だ。

全共闘世代はいま何を思う

団塊の世代は二十年ほど前、全共闘を結成、日本中の大学で学生叛乱をひき起こした。当時(七〇年)の運動もそうだし、その前の安保闘争(六〇年)もそう

だが、あれほど收拾のつかない騒ぎになったのは、共産党の指導力が低下し、その権威を認めない人びとが増えていたからである。五六年のハンガリー動乱や、スターリン批判が引きがねとなって、たちまち、反スターリン主義が日本でも当たり前になった。

反スターリン主義を唱えると、どういうことになるか? 日本共産党をはじめとして、それまで日本に根づいていたマルクス主義・共産主義の伝統の、かなりの部分を否定しなければならなくなる。そこで、ある者は反スターリン主義の新しい「前衛党」建設に期待をつなぎ、ある者はヨーロッパ・マルクス主義や自主管理・構造改革に期待をつなぎ、ある者は吉本隆明の自立の思想に期待をつなぎ、……ということになった。要するに、混乱の極みである。

この頃のことを思い出しながら、現在の東欧情勢に目をやると、アンビバレントな感情に襲われる。

いっぽうでは、それ見たことか、と思う。ハンガリーでもチェコでも、かつてさまざまな汚名を着せられて闇に葬られた人びとが、名誉を回復した。どうだ、反スターリン主義が正しかったことが、証明されたろう。やっぱり俺たちは、正しかったんだ。

こう胸を張りたいいっぽうで、マルクス主義に、どんな希望のひとかけらも残されていないことがはっきりしたわけでもある。これは、つらいと言えども、全共闘の学生たちは、ソ連も中国も、日本共産党も、革マルや中核だってどうしようもないと思いつつも、自分たちの社会が、昔マルクスが描いたような道筋にしたがって、資本主義社会と違った方向に変化してゆくのだ、いやそうあって欲しいという、漠然とした感覚をもっていた。歴史はまだ信じられていた、と言ってもよい。しかし今回の東欧情勢をみれば、そういう歴史感覚がまるっきり見当はずれだったことを認めない

わけにはいかない。若い日の努力がまるで無駄だったと言われたみたいで、当惑を隠せない。

実存主義は「すきま思想」だった

あとの時代から見て、トンチンカンだとわかることがあっても、結局のところ、思想の流行りすたりは、その時代々々の若者の切実な感覚や感受性に支えられていくのだ。

日本の流行思想の流れは、マルクス主義との関係で考えるとわかりやすい。

あまり古いことは、よく知らないが、六〇年代から七〇年代にかけて、まだ若者は、マルクス主義の影響圏でものを考えていたと思う。それでも、マルクス主義の与える大きな物語の書き割りが、だんだんひび割れを起こしつつある、という感覚があった。マルクス主義を疑いながらも、まだ思想なしではいられなかった時代である。

そういう時代に流行した思想の主だったものを、順に考えてみよう。まずまさきに名前のあるものが、実存主義である。最近でこそさっぱりだが、一時期サルトルの読まれたことといったらなかった。

実存主義は、マルクス主義の大きな物語を、ひとりの人間のサイズに切り取ったらどうみえるか、という問題を考えている思想として、人気があった。

マルクス主義は、失われた共同体（コミュニオン）を再建しようとする物語である。大状況やらその時々々の政治課題やらスローガンやらの大きな言葉で現状を分析し、そこから将来にいたる歴史の道筋が語られる。この道筋をたどる主人公が、人類（個々人の運命をこえた「超主体」）である。

歴史の道筋の途中で、思い迷ったり、倒れたりするひとりひとりの主体（人間）は、ではどういう言葉を持ってばいい

か。戦後の自由な社会に生まれた若者が、マルクス主義の運動に加わるのはいとして、その動機や倫理的な支えを、どうやって見つければよいか。そのギャップを埋める思想を、人びとは実存主義に求めた。

実存主義はひとことと言うと、人間はどうしようもなくバラバラ（実存）である、という主張である。バラバラのままではしようがないから、個人を超えたなにか、たとえば政治にこぞって飛びこむしかない。これは理屈ではないので、「不条理」という。おなじことを、個人を超えたもの（政治や歴史）の側から見ると、「弁証法」でもある。弁証法は、形式論理を超越した論理（果たして論理か？）という意味であり、マルクス主義もこれを合言葉にしていた。サルトルの実存主義は、結局のところ、党の方針に対する疑問や、スターリン批判をめぐる問題に悩みながらも、マルクス主義の大枠を捨てきれない人びとに、ちょう

どよい思想——つまり、マルクス主義の欠落部分を埋める「すきま思想」みたいなものだった。

構造主義は、「歴史」を解除してくれた

六〇年代の末から、わが国でも構造主義が流行りはじめた。どこまで理解されていたか怪しいものだが、受け入れられた理由は明らかだと思ふ。

「変換」（もともとは数学用語だが、変化のプロセスと考えてもよい）に関して不変なものを、「構造」という。

人類学者のレヴィ＝ストロースは、神話や親族を研究して、人間の精神にもこうした「構造」が認められる、と言いだした。未開人だろうが現代人だろうが、精神の「構造」は同じである。つまり、ちっとも進歩していない、ということになる。

構造主義は、「歴史などなくてよい」という思想である。それは、近代を中心

に考える合理主義（ついでに、封建制↓近代↓社会主義↓共産主義へと、歴史必然的な変化が生ずるとするマルクス主義）も、西欧が中心でないといふすまな（お役御免になる）。もうマルクス主義者でなくたってかまわないや、と考えるのに都合がよかった。

過激派で暴れていた学生が、就職したりする。マルクス主義が正しいと思っていたはずなのにあっさり資本主義の軍門に降るようで、どうしたって心理的抵抗がある。それを構造主義が、痛みわけに持ちこんでくれるので有難い。歴史に決定的な意味がないとなれば、マルクス主義もぐらつくが、近代主義（の上に立つ資本主義）だって足下をすくわれる。構造主義は、近代主義とマルクス主義を同時に解除できる思想なのだ。（もっと詳しいことは、私の『はじめての構造主義』——講談社現代新書——をご覧ください）

エコロジイは、政治ぬきのマルクス主義である

七〇年代に入ると、マルクス主義の退潮と入れかわりに、公害や環境破壊に人びとの関心が向くようになった。それまで水俣病やイタイイタイ病はほっぽらかし同然だったのだから、当然と言えば当然である。けれども、こうした自然保護やエコロジイ運動の流れのなかに、資本主義にかわる新しい社会のイメージを求める人びとも多くなった。

エコロジイにも、いろんな傾向の人びとがいるが、資本主義社会に暮らす罪悪感（危機感）が共通の基盤になっている。この感覚は、マルクス主義に通じる。あるいは、マルクス主義疎外論のパリエーションのひとつだ、と言ってもいい。マルクス主義が資本主義から脱出する物語だったように、エコロジイも産業文明からの脱出の物語なのだ。昔のマルクス主義者のなかに、『資

本論』を物象化論として読む（経済学としてはもう読まない）だとか、コミュニオンに人類の可能性をみるだとか言い始める人びとも出てきた。田舎に住んでみたり、無農薬野菜を作ってみたりと、ライフスタイルの点でもひとつの流れになった。

エコロジイでは、階級闘争が、自然と人間との闘争に置きかわっている。ただし、前衛党や暴力革命にあたるものではなく、直接コミュニオンを目指そうとする。政治ぬきのマルクス主義、である。

産業文明を、自然からの収奪（搾取）として告発し、その外にまったく新たな社会（コミュニオン）を築こうとする、極端に厳格なエコロジイ運動を、エコロジカル・ミニマリストとよぶことにしよう。これは思想として、成立しうるか？ エコロジカル・ミニマリストの思想が、ごく少数の人びとにとどまっている間はまだいい。それ以上の現実的な勢力

やっぱり偉大なマルクス

そこで話をむしかえすようだが、マルクスがどれだけ偉大だったか、もういさぐよく考えてみたほうがいい。

マルクス主義は、今でこそ古色蒼然だが、当時は「現代的」で、斬新な思想だった。大正から昭和にかけての「マルクス・ボーイ」と言えば、『資本論』を読んでカッコよく、女性にだつてもててもて。考えてもみるがいい。マルクスの経済学は、英国古典派を軽くしのいで、世界最高の水準。哲学（弁証法的唯物論）だつて、それにひけをとらない。そのほか、歴史学（唯物史観）、文学・芸術理論（社会主義リアリズム）、国際関係論（帝国主義論）……と、緊密に構築された全体が、マルクス主義である。人間のこしらえた思想で、ここまで包括的で完成度の高いものはそう滅多にない。

マルクス主義は、時代の新しい現実

ん先に進んで、資本主義も昔とだいぶ様子が違ってきた。そして、時代遅れのマルクス主義の手の届かないものになったことがはつきりしたのが、一九八九年の一連の事件である。

迷走する国際社会

社会主義諸国の先行きが不透明になったので、世界がどっちに向かうのか、まったく読めない時代に入った。

マルクス主義総崩れの兆候は、早くから現れていた。白蟻に喰い荒らされるように、マルクス主義思想の柱石のひとつひとつが、内部崩壊していく。マルクス主義経済学説（特にその、労働価値説）、弁証法的唯物論（特にその、上部構造／下部構造図式）。史的唯物論（特にその、階級闘争史観）。プロレタリア独裁論（特にその、国家消滅説）。となれば、それらによって構築されているソビエト体制も危うい。

正面からぶつかったのだ。当時、最大の問題だった資本主義。これを、最新の経済学を駆使して分析しつくす。返す刀で、哲学も、歴史学も、法学も、どんな既存の学説だって批判してしまう。自分たちの生きる社会の現状を、トータルに考えていく筋道をつけているところがとにかく、すごい、すごい。

だから、そこまでのいい線を行っていたマルクス主義が、どうして進歩をやめてしまったか、ということのほうがよっぽど不思議なのだ。

それは、逆説めくが、マルクス主義があんまり立派で、非の打ちどころのない思想だったせいだと思う。マルクスもわれながら、信心。自信をもって、これは「永遠の真理」だ、と思ってしまった。だがそのとたん、マルクス主義は科学でなくて、宗教になってしまった。しかも誰かが、その誤りを指摘しようものなら、「人民の敵」「反革命」とレッテル

二十年前から、アメリカのシンクタンクは、ソビエト崩壊のいろいろな筋書きの検討に入っていたらしい。十年前にはわれわれ日本の大学院生仲間でも、共産党独裁をどう安楽死させるかが、話題になっていた。あとは社会主義の現実、民衆がはつきりノーと言ひさえずれば、この日の来ることは目に見えていたのである。

マルタで米ソ首脳が歴史的会見をし、冷戦の終わりを確認した。ソビエト国内ではまだこのさき、かなりの紆余曲折が予想されるが、客観的にみて、米ソがいかにあわなければならぬ条件はなくなった。多角的な調整の時代の始まりである。

社会主義は、国境を越えた共通理念だった。だから東欧諸国を、ひとまとめにしておくこともできた。でももう、そのカードは使えなくなった。いつ、自由も、国境を越えた共通

を貼られるに決まっているから、うっかりそんなまねもできない。というわけで、ぱったり進歩が止まってしまふ。

アングロ・サクソン系の国々（英米）が、結局マルクス主義を受け入れなかったのは、ここに原因があるだろう。神ならぬ、たかだか人間の考えた思想が「真理」であるなんて、とんでもない思い上がりだと思えないのである。

マルクスは、宗教を「阿片である」と否定したくせに、自分の思想が宗教みたいになってしまった。彼は、ユダヤ教の預言者モーゼと似ている。資本主義社会（人類の奴隷的状态）を脱出し、約束の地（共産主義社会）にたどりつこうという、大きな物語を人びとに示したのである。しかもそれを「預言」、すなわち、これから起こる歴史的な出来事として告げたものだから、マルクス主義者はみんな、それに金縛りになってしまった。

マルクス主義がこうやって足踏みを続けているあいだに、現実のほうはどんどん理念ではある。ただしそれだけでは、自由にするおもうとする各国を、コントロールする枠組みを作れない。日本のように国際社会のルールに無頓着で、勝手放題をする国が出てきても、なかなか打つ手がない。

日本が自分をコントロールする思想を生み出し、それを世界と共有する道をさぐることによってしか、乗り切れはしない。

これからほんとうの、思想の時代が始まる

外国から見ると、日本はほんとに不思議な国に見えるらしい。今日これだけの経済大国でありながら、そして文化・教育の程度が高いにも関わらず、日本の顔となるような、世界的な思想家がひとりもない。日本語を思わず勉強したくなるような、興行きのある文章の書き手がいな。

そういう印象は、外国の人びとの無知

新日本報 文化

論壇時評

筒井 清忠



2月号

今月は各誌とも激変する。東欧情勢についての論考... 多くの載せているが、何か物主なので「静かにしている」...

新思想の確立を強調 「時代との格闘」説く橋爪氏

橋爪 三郎



橋爪 三郎氏



河合 隼雄氏



橋爪 三郎氏

思想を断つての現代日本に。クオニの神の分析に始まり、おいて、過去の東洋、欧米... 橋爪氏が「時代との格闘」を説く理由を語る。

大きな影響を与えている。めよとして右の二人の文章... 橋爪氏は、現代日本を「時代との格闘」の場と捉えている。

や誤解にもとづく部分もある。しかし日本人が、「思想」と名のつくものを、大事にしてこなかったことも確かなのだ。

足なのだ。考えてみれば、どんな思想だ。って最初に苦労して考えた人間がいる。それを見習わないようでは、思想もへったくれもないものだ。

しよう。その呼びかけが、思想のはずいまほどそれが、求められているときはない。それにまた、日本はじつに絶好の位置にある。まず日本人は、今もつとも問題である日本について、圧倒的に多くの情報と知識を持っている。